

2008 年 1 月 7 日

人間科学研究科長 殿

## 菱田慶文氏 博士学位申請論文審査報告書

菱田慶文氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱をうけ審査をしてきましたが、2007 年 12 月 5 日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

### 記

1. 申請者氏名 菱田慶文

2. 論文題名 ムエタイの賭博化変容

3. 本文

本論文は、タイに古くからおこなわれる格闘技であるムエタイをとりあげ、賭博との関わりから、その変容について論じるものである。

全体は 5 章で構成され、内容は以下のようなものである。

「はじめに」

本研究の目的と方法が述べられ、先行研究が検討される。ムエタイは、これまで、タイ式キックボクシングとして欧米それに日本において興行され、また今日人気の K 1 など総合格闘技の基礎とみなされたこともあって、世界に多くのプレーヤーとファンを有している。そのためムエタイ関係の出版物も数多く見られる。しかしそれらの大半はムエタイに習熟するための教則本であるか、あるいはムエタイファンのための興行情報誌であって、これを学術研究の対象とする試みはごく限られたものであった。そうした中で第一に挙げべきは 1998 年にアメリカのコーネル大学に提出された Vail P. の博士論文 *Violence and control: Social and cultural dimensions of boxing in Thailand* であり、また 2004 年にタイのチュラロンコン大学に提出された 2 件の修士論文 (Apisake, M. *The changes in the role and significance of Muaythai, 1920-2003*; Lois, A.D. *Sport, tradition and women in competitive MuayThai.*) である。Vail 論文はタイ文字で記されたムエタイ関連史料と、さらに 18 世紀以降に行政官など欧米列強の訪タイ者が残した諸文献の網羅的分析と自身の人類学的フィールドワークとによって、ムエタイの歴史を再構成し、また、タイ近代化の中に初めてムエタイを位置づけてムエタイの文化変容を論じている。Apisake 論文と Lois 論文も Vail の仕事を引き継ぐ形で近代タイにおけるムエタイの社会問題を扱っている。

本論文は、こうした先行研究に依拠しつつ、しかし、これら先行研究が扱わなかったもののタイの文化研究にとって重要であるムエタイ賭博の問題を論じようとしている。この

問題意識は、論文作成者がタイのムエタイジムに長らく所属して興行試合にたびたび出場した経験に発するもので、今日のムエタイ関係者に暗黙裡に共有される“相手をノックアウトすることを避ける”奇妙な試合コードが実は賭博との関わりの中で形成されるとする、その過程を再構成しようとするものである。そのために、Vail が用いたムエタイ史料に加えて、過去半世紀の間にタイで出版されたムエタイ情報誌、さらにムエタイ関係者（バンコクと諸地方のムエタイジムのオーナー・トレーナー・選手、観客・ギャンブラー、専用試合場であるラジャダムナンスタジアムとルンピニースタジアムのオーナー・審判、ムエタイ情報誌記者等々）への聞き取り情報を総合して立論する方法を採用している。

### 第1章 「タイの概況と賭博」

タイの歴史と文化が賭博の視点から概観される。1935 年に制定されたタイの賭博法は、競馬を除いて、一切のものを禁じている。ただし、警察署に少額の登録料をもって届け出をすれば、1 日を超えない範囲で賭博は認められる。今日、諸種の祭礼に際してなされるムエタイ賭博は、この限りで合法であるが、これは 13 世紀のスコタイ時代から確認される祭礼時ムエタイ賭博と連続するもので、ムエタイ賭博の古さがうかがえる。しかし、論文作成者はフィールドワークによって、祭礼と関わらない日常的で、かつ賭け金の大規模なムエタイ賭博が登録を経ることなく違法に、かつバンコクの 2 大スタジアムからのテレビ・ラジオ中継によって全国적으로おこなわれ、そしてこの違法賭博（後述のレイト賭博）こそが上述した試合コードを生み出したと仮定する。

### 第2章 「ムエタイの変容」

ルール、技術それに社会・文化的意味の視点からムエタイの発展史が記述される。ムエタイは 1920 年代にボクシングの影響を受けてグローブを着用しリングの上でラウンド制によって闘うなど新ルールを導入して今日の形を整えるが、この段階のものが近代ムエタイ、それ以前のは前近代ムエタイとして区別される。前近代ムエタイは、さらに、より古い素手によって闘うものと、より新しい拳を包帯によって縛って闘うもの（ムエカッチュアクと称される）に分けられ、共に競技と娯楽のほかに武術・護身術として実践されたこと、また仏教の影響を受けて独自の精神文化を形成したことが述べられる。近代ムエタイは、仏教的精神文化を維持しつつ、タイ社会の近代化の中で新たに国民文化化する。現在の国名であるタイ王国は、1932 年の立憲革命によってシャムから変更されたもので、“タイの格闘技”を意味するムエタイの呼称もこの革命後に成立している。ムエコラート（タイ東北部のコラートでおこなわれる格闘技の意）など地方名を冠する習慣が国名を冠する形に変化したのであり、さらにナショナリズムの高揚の中で列強に抗するため、伝統、勇らしさ、勇敢、愛国心といった価値がムエタイに付与されてゆく。

### 第3章 「ギャンブルムエタイ」

ムエタイ賭博の方法が説明され、今日の試合コードが生み出される過程が再構成される。

ムエタイ賭博には 3 つの方法が区別される。胴元賭博、インサイド賭博、レイト賭博である。胴元賭博は 3 ～ 5 組の試合の勝者を予想し、賭け金を胴元に預け、予想選手がすべ

て勝った場合に倍の金額を手にするものである。インサイド賭博は、選手の関係者の間だけでなされるもので、双方が同じ額を用意し、勝者側がこれをすべて手にする。この賭博は、かつてギアーツがバリ島の闘鶏を深い遊び(deep play)と認定したのに似て、当該選手に対する家族・友人の好意の証しの意味があり、いわゆる金儲けに優先している。これら2つの方法がいずれも1対1の丁半賭博であるのに対し、レイト賭博は5ラウンドの試合が終了するまで誰れと何度でも、しかも賭け率(レイト)と賭け額をそのつど自由に変えておこなうことができるものである。同一空間にいる場合は両手の指を使った独特のサインでどちらに何対何でどれ程を賭けるかを示し、合意する相手を探す。最初に賭けた選手の旗色が悪いと判断すれば、別の人と、今度は相手選手にレイトを変えて賭けて損失をカバーすることができることから、今日おこなわれるムエタイ賭博は、このレイト賭博によるものが専らとなっている。時々刻々変化する戦況を読み取る才覚があればレイトを駆使して最終勝利を手に入れることが可能なこの方法は、たちまち多くのギャンブラーを惹きつけ、スタジアムに出かけなくても賭博ができるようにムエタイの全国テレビ放映を実現させ、選手の個人情報専門雑誌を創刊させて、一大ムエタイビジネスを出現させる。

1980年代と想定されるレイト賭博の普及は、しかし、闘い方に変化を迫った。これ以前のムエタイでは賭博の有無に関わらず相手をノックアウトすることが期待され、そのため、選手も破壊力の強いパンチを中心とした戦法によって攻撃的に対戦している。しかし早いラウンドでの決着はレイト賭博の本来の魅力を減じるもので、レイト賭博にとっては最終ラウンドが判定によって決着することが望ましい。選手もギャンブラーの期待に答えるため、パンチよりダメージの少ないキックを多用する戦法を選択する。この選択は3週間に1度の割で試合をする選手にとっても、また試合数を安定的に確保したいジムオーナーにとっても好都合であり、結果、選手・プロモーター・ギャンブラーに共有される冒頭に記した暗黙裡試合コードが創出する。

「結論」では、上述の内容が整理総括される。

(本論文の評価)

本論文は、問題設定のオリジナリティーの高さ、資料の独自性と論述の実証性、結論の妥当性をもって、博士(人間科学)の学位を授与するに値する水準に達していると判断される。

#### 4. 菱田慶文氏博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学教授	学術博士(筑波大学)	寒川恒夫
審査員	早稲田大学教授	博士(人間科学)(早稲田大学)	蔵持不三也
審査員	早稲田大学教授	博士(人間科学)(早稲田大学)	店田廣文